

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1867 号

One-year outcome of the trans-vaginal minimal mesh pelvic organ prolapse repair without using commercially available kits

(minimal mesh TVM 手術 1 年目の有効性と安全性に関する検討)

高澤 直子 (たかざわ なおこ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

Tension-free Vaginal Mesh(TVM)手術は有用性の高い手術ではあるが海外ではメッシュ関連合併症の報告も多く、合併症を極力回避できメッシュの有用性を最大限にいかす改良が求められている。これまで経膣メッシュ開発当時から使用されていた閉鎖孔を貫通する大きなメッシュを用いていたが、我々は前膣壁の下垂には膣断端の挙上が深く関連しているという報告から、膣断端の挙上を確実にすることによりメッシュの形状が小さく閉鎖孔を貫通させなくても重症な骨盤臓器脱の修復が可能ではないかと考えた。そこでメッシュ面積を 56%まで縮小し閉鎖孔を通らない形状に改良したメッシュを用いた手術を行い、その有用性について検討した。2014 年 7 月より 2015 年 5 月までに minimal mesh TVM 手術を施行した 91 例を対象とし、後ろ向きに術後 1 年目の成績を検討した。手術はポリプロピレンメッシュを 5×7cm 大の半円形の形状に 2.5cm 幅の 2 本の脚がついた形に作成し、前膣壁創から仙棘靭帯までのルートを作成。肛門脇の創部から島田式ニードルを穿刺し仙棘靭帯を貫通させメッシュ脚を通す方法で行った。手術前後の Pelvic organ prolapse quantitative description system (POP-Q)、腹圧性尿失禁(SUI)の有無、過活動膀胱症状質問表(OABSS)、P-QOL(Prolapse Quality of Life Questionnaire)について検討した。再発の基準は最下重点が POP-Q stage 2 以上 (hymen から 1cm 以上) を再発と定義した。年齢の中央値 67 (48-83)歳、BMI の中央値 22.81(17.77-33.16)、中部尿道スリング手術併用 91 例中 48 例 (52.7%)、術前 POP-Q stage 3 71 例(78.0%)、stage 4 20 例(21.9%)であった。MRI で恥骨直腸筋の恥骨への付着部損傷(Avulsion)を 24 例(26.3%)に認めた。術後 1 年目で stage 2 の再発は 91 例中 10 例 (10.9%) に認め、stage3 以上の再発は認めなかった。全症例、自覚症状は認めず経過観察となっている。再発有無に関する術前因子の検討では BMI のみ有意差を認め、術前 POP-Q stage、Avulsion の有無は有意差を認めなかった。術前に SUI を認めず、中部尿道スリング手術を併用していない 43 例中、de novo SUI は 9 例であり、そのうち 2 例が術後に尿失禁防止術の追加手術を要した。メッシュびらんは 2 例(2.1%)に認めたが局所女性ホルモン投与のみで軽快した。術後排尿障害は中部尿道スリング術を併用した 1 例のみに認め、スリングの切断により軽快した。痛みについて術後性交時痛は認めず、骨盤痛を 1 例(1.0%)に認めた。Minimal mesh TVM 手術はメッシュ関連合併症が少なく、短期成績では十分に重症な骨盤臓器脱の修復が可能であると考えられた。